

序章

抑圧された暴力のゆくえ

松岡 光治



「ケイトウ・ストリート陰謀事件」の結末

1820年5月1日、首謀者のアーサー・シスルウッドを含めた5名が、ニューゲイト監獄で公開処刑された。絞首刑後に斬首が命じられた最後の例。

第一節 産業革命期とヴィクトリア朝の社会風潮

ディケンズ文学において暴力問題を論ずる場合、その前提としてヴィクトリア朝以前の産業革命期、特にジョージ三世が即位した一七六〇年から、彼の晩年の発狂による摂政時代が終わった一八二〇年までの約六十年間の社会風潮を押さえておく必要がある。産業革命が始まって議会の主導権を握ったトリー党とそれを味方につけたジョージ三世の専制政治、フランス革命後のトリー政権の保守反動化と猛烈な弾圧による内地の独立を早めてしまったジョージ三世の絶対主義的な外政、これらの特徴はすべて暴力による抑圧であった。

この間、イギリスの支配階級の大半は、一七九〇年に出版された近代保守主義の聖典『フランス革命についての省察』で革命行為とその根本思想を非難し、軍隊の力で革命を鎮圧すべきだと論じたエドモンド・バークと同じ考えを抱いていた。暴力を統制するには、より組織化された強力な暴力が必要で、マックス・ヴェーバーの言葉を借りれば、「合法的な暴力の独占 (monopoly of legitimate physical force)」¹つまり主権国家の合法的な暴力の独占を通して軍隊という正義の暴力を用い、野蛮な暴徒と化した被支配階級の悪の暴力に対抗すべきだと考えたのである。これは「目には目を」というハンムラビ法典に由来する旧約聖書的な考えで、ディケンズの小説世界での抛り所

である新約のイエスの教えに反するものだが、実際には受けた暴力の数倍から無限大倍の暴力行為となるので、旧約の同害復讐法にも反する考えだと言える。

十八世紀末から十九世紀になっても、ジョージ三世の支持を得たピット政権は恐怖政治を行い、そうした保守反動の時代がナポレオン戦争後のウィーン体制下でも続き、ディケンズが生まれた一八一二年に政権に就いたリヴァプール内閣と議会もストライキを武力で鎮圧し、集会・結社・出版の自由を束縛していた。しかし、民衆弾圧の象徴となった一九年のピータルーの大虐殺をピークに、摂政時代が終わった二〇年頃からナポレオン戦争後の不況は徐々に回復し、労働者の不安も多少は解消された。そして、二四年には団結禁止法の撤廃によって労働組合が初めて合法化され、世の中も自由主義的な社会風潮へと転換するようになる。

このような産業革命期において暴力的な社会風潮が特に顕著に現れていた分野は死刑である。この時代は産業革命の負の遺産である貧困の結果として悪に走る者が非常に多く、その防止のために死刑となる罪が増した。一六八八年に五〇ほどだった死刑の罪状は一七六五年に一六五となり、血の法典（ブレイク・アンド・ブレイク）が廃止された一八一五年には二八八にまで増えている。ただ、摂政時代以降はスリのような窃盗犯が除外され、死刑になる罪もヴィクトリア朝が始まる頃には一三にまで激減し、六一年には放火、殺人、反逆罪、海賊行為の四つだけとなった。²

イングランドで最も残酷な死刑は何かと言えば、それは国

王への大逆罪グレート・トレイジーズに対する「首吊り・内臓えぐり・四つ裂きの刑 (changed, drawn, and quartered)」という中世以来の刑である。『二都物語』で大逆罪に問われてしまったチャールズ・ダーネイは、「すのこハドそりで運ばれ、首吊りで半殺しの目に遭い、引き下ろされたあと自分の目の前で肉を切られ、内臓がえぐり出されて焼かれるのを見せられ、それから首を切り落とされ、体は四つ裂きにされる」(第二巻第二章) という危機に瀕するが、彼自身がルーシー・マネットとの会話でジョージ三世と同列に扱ったジョージ・ワシントンも、もし独立戦争に負けていたら同じ刑に処せられ、スコットランドの愛国者ウィリアム・ウォリスのように別の形で歴史に名を残していたはずだ。そうした残酷な刑が廃止になって絞首刑が課せられるようになったのは一八一四年だが、この蛮刑が廃止されたあと国王はなお絞首刑後に斬首を命ずることができるとされ、その権限が最後に行使されたのが一八二〇年のケイトウ・ストリート陰謀事件(序章の「犀絵参照」)である。その意味でも摂政時代が終わった一八二〇年はイギリスの暴力的な社会風潮の転換点となる重要な年だと言つてよいだろう。

十八世紀後期までの監獄は暴力と悪徳の温床で、懲罰によつて犯罪全体を抑制しようとする恐怖の教育に支えられていたが、フーコーが『監獄の誕生』で述べているように、フランス革命前後に権力の在り方が君主の権力から規律の権力に移行するとともに、権力を行使する側は行使される側の身体を改造・服従・訓練によつて「従順な身体」にするために、彼らを管理する法律への愛を植え付けようとした。十九世紀になると下院も委員会を設けて調査に乗り出し、ニューゲイト監獄の女囚が置かれた状態の悲惨さに衝撃を受けたエリザベス・フライ——「監獄の天使」と呼ばれたクエーカーの博愛主義者——の尽力によつて監獄がやや改善されるようになった。そして、摂政時代後の一八二三年には手かせ・足かせの使用禁止などを盛り込んだ監獄法が成立し、三五年にはチェック機能として監督官の導入が決まり、監獄における暴力は次第に減つて行つたように見える。

しかし、産業革命期の社会風潮を特徴づけた暴力は、摂政時代が終わる一八二〇年代以降、実際には抑圧されて表面的に見えなくなつたにすぎない。では、抑圧された暴力はどこへ行つたのだろうか。他者に対する抑圧としての暴力は、ヴィクトリア朝を経済的に支えて文化の担い手となつた中産階級のリスペクタビリティという概念に暗示されるように、世間体のために抑圧されたものの、その抑圧された自己の暴力は別の形態をとるようになったのである。とりわけ、セルフメイド・マンや金の力で階級を上げた人間(例えば、デイヴィッドやピップ、悪

人であれば、カーカー、ヒーブ、バウンダビー、ヘッドストーン、そして中産階級にもかかわらず貴族の生活様式を模倣するダンディー（例えば、ステイアフオース、ハートハウス、ガウワン）といった俗物たちの中に、抑圧されて鬱積した暴力の兆候を見て取ることができる。

ここでは一例として『リトル・ドリット』のアマチュア画家、ヘンリー・ガウワンの暴力を見てみたい。リトル・エムリを誘惑して捨てたステイアフオースの流れを汲むガウワンは、過去にミス・ウエイドに対して同じようなことした退廃的な男だ。アーサー・クレナムは最初にガウワンの姿を見かけたとき、この男が足のかかとで石を本来の場所から無理に蹴り出すという些細な行為に残酷性（第一巻第七章）を感じ取っている。これをダンディーな俗物のエレガンスの下に抑圧されたバイオレンスの無意識的行動化として暗示した作者の戦略は見事だが、この戦略を見抜けない読者にとつても、ガウワンが獐猛な飼い犬を殴って血みどろにする残酷性（第二巻第六章）を実際に目にすれば、やがて彼が若い妻——ペットという名前に注意——に対して何をするかは容易に想像できる。フィズの挿絵（図版①）のキャプション (Instinct Stronger than Training) では、飼い主のしつけを守らない猛犬の本能の強さが示されているが、中産階級のリスペクタビリティを内面化した飼い主自身の暴力的な本能の抑圧がいかに危ういものであるかも同時に仄めかされている。

ところで、ヴィクトリア朝において抑圧された暴力を検証す



図版①「本能はしつけより強し」（第2巻第6章、フィズの挿絵）
悪人ブランドワに吠えかかる猛犬に暴力を振るう飼い主ガウワンと怯える女性たち。

る場合、ディケンズ作品では『大いなる遺産』が最も示唆的である。『ヴィクトリア朝小説における紳士観』の著者ギルモアによれば、ディケンズは『大いなる遺産』の時代設定を十九世紀初期——犯罪者たちが残酷な扱いを受けていた時代——にする一方で、小説が執筆された一八六〇年当時——ヴィクトリア朝大好況期で国民の紳士意識が強くなった時代——を念頭に置き、貧しい鍛冶屋の少年が紳士になるという典型的な具体例を描いて見せることによって、ヴィクトリア朝社会が上品であることに執着した複雑な要因を示すことができたと言っている（Gilmore 129）。つまり、ジェントルマンになりたいという願望は、自分の階級から脱出したいという俗物根性だけでなく、リスベクタブルな生活の中で「優しい男（gentle man）」になりたいという気持ちとして肯定的に解釈できるわけである。

このギルモアの見解に付言するならば、遺産相続の見込みを得たあとこのピップの強い罪意識は、残酷な暴力が支配していた摂政時代から抜け出したヴィクトリア朝中産階級の人々——犯罪と文明、暴力と上品は対立せずに密接な関係にあること、比喩的に言えば、サティス・ハウスの庭で別々に咲いている花と雑草も地下では根を複雑に絡ませていることを認めたくなかった中産階級の人々——が、自分の暴力性や犯罪性に対する意識的な抑圧にもかかわらず、時として抱かざるを得なかった罪悪感の典型ということになる。

ピップの罪悪感や労働者の時からあったものだが、それが明確な形をとるのはサティス・ハウスという中産階級の世界に

入ってからで、そのことはスポーツマン精神にあふれる少年紳士ハーバートとのボクシングの場面で証明できる。ピップは相手をいとも簡単に殴り倒すが、労働者階級の本能であろうか、「殴るたびに、その打撃がだんだん強くなり」、勝利したあと自分も「残酷なオオカミか、野獣の子供」（第一章）のようにな気になっている。こうした罪悪感や遺産相続の見込みを得たあとも消えないが、それは紳士階級に身を置くようになって、どこかで自分が暴力中心の犯罪世界とつながっているのではないかという不安感から生じるものである。しかし、エステラが暴力による勝利の褒美としてピップにキスを与えたことは、彼女自身に内在する被虐性の愛とは別に、暴力に対するヴィクトリア朝中産階級の心的傾向が摂政時代のそれと実際には大差ないことを暗示しているように思えてならない。

同じサティス・ハウスでピップがミス・ハヴィンシャムの絞首刑の幻影を見た（第八、四八章）のも、この屋敷に呼ばれたあと恩人気取りの乱暴なパンブルチュック（ジョーの母を虐待した父の実弟）に対して「わっと泣き出し、相手に飛びかかり、全身殴りつけたくなった」（第一二章）のも、被害者意識によるルサンチマンから生じた復讐願望の表出と考えるとよいだろう。また、ミス・ハヴィンシャムの花嫁衣装が炎上する場面において、「私たちは不倶戴天の敵であるかのように床の上で揉み合った」（第四九章）という語り手ピップの表現から、母性や女性性を拒んでピップを虐待したミス・ハヴィンシャムや他の女性たちに対する「象徴的なレイプ」（Hartog 259）を読み取る

うとする解釈は極端すぎるものの、マグウィッチが逃げようとする脱獄囚コンピソン（ミス・ハヴィシヤムを捨てた婚約者でマグウィッチを利用した似非紳士）を力いっぱい押さえつけた沼地の格闘場面（第五章）を想起すれば、このピップの消火作業も不当に虐待された人間の抑圧された復讐願望の無意識的行動化として読むことができるだろう。⁶

では、このような抑圧された暴力を念頭に置き、ディケンズ文学において暴力とその変奏がどのように描かれているか、ジェンダー・階級・人種の側面に絞って概観してみよう。

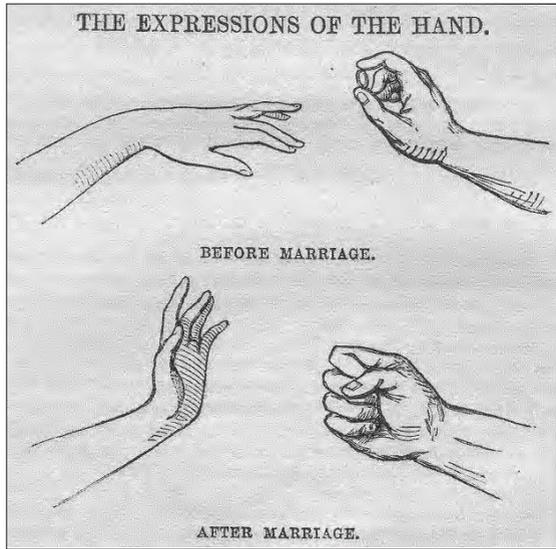
第二節 暴力のジェンダー化と二重規範

資本主義と家父長制が共犯的に労働市場と家庭の双方に作用することで女性を抑圧し、自己実現の可能性を奪われた女性の無権利状態が合法化されていたヴィクトリア朝の状況は、行為主体が明確でない〈構造的暴力〉によるものだったので、直接的暴力の場合のように簡単には改善できなかった。それでは、五〇年代のヴィクトリア朝大好況期へ移り、労働者階級の運動が平和的・合法的なものに変わっても、労働者たちの暴力は以前とほとんど変化がなかった。妻に対する夫の家庭内暴力、いわゆるドメスティック・バイオレンスの証拠として、こころ着目したいのは暴力を受けてきた目のまわりの黒あざで、その例はディケンズ作品で枚挙にいとまがない。特筆すべきは、女

もブードル犬やロバのように保護を与えられるべきだという考えから、一八五三年六月に婦女子加重暴行防止・処罰法案が制定されたことだ（本書目次の図版参照）。この法案は摂政時代のあと議会を通過していたのだが、実際には制定されて来なかったものである。事実、この法案が制定された当時の下層階級では、まだ夫が自分のDVを当然視しており、制定直前に連載された『荒涼館』では、煉瓦職人の奥さんが「目のまわりを黒くはらして」（第八章）いるのに、夫はその権利の正当性を語り手のエスタ・サマソンに主張している。こうした社会風潮を反映するかのようには、一八五六年の『パンチ』では指輪を持つ夫の手が結婚後に拳骨に変わる様子が諷刺的に描かれている（図版②）。⁷ただし、この法案が制定された五〇年代には、『ハー

ド・タイムズ』でも取り上げられる離婚問題や既婚女性の財産相続問題が論議されるようになり、それぞれ五七年と七〇年の法律で不十分なながらも多少は改善されている。

ディケンズの描くDVには「パンチ・アンド・ジュディ」の強い影響が見られる。典型例はその人形劇の旅芸人たちが登場する『骨董屋』のクウィルプと彼に魅せられた従順な妻ベツィーである。パンチが使う暴力の道具、どつき棒は吉本新喜劇で使うゴム棒のように「ゴたびた喜劇（slapstick comedy）」の代名詞となっている。むろん、それはヘゲモニーを握るための男根の象徴であり、DVが夫婦逆転の形で横行する『大いなる遺産』の鍛冶屋では、ジョー夫人がピップを「手塩にかけて」育てるのに使用する「くすぐり棒（Tucker）」（第二章）、そし



図版②「手の表情 — 結婚前と結婚後」『パンチ』
(1856年10月18日号)

て腹を立てた彼女がジョーから奪って隠してしまふ火かき棒
(第二章)も同じ象徴だと言える。

クウィルプ夫人には『オリヴァー・トウィスト』で暴力的な
ビル・サイクスに魅せられた愛人ナンシーと同じ心性が見られ
るが、クウィルプによってキットと一緒に棒で殴られた逆立ち
少年トム・スコット(本書のジャケツト参照)が主人に対して
抱く非異性的な愛情もその心性に近い。こうした心性には無力
な自分を防衛するために発生する加虐者への自己の同一視、そ
して自我の防衛機制としてのマゾヒズムが見出せる。ただし、
一見サデイストに見えるクウィルプだが、彼の場合も加虐性愛
が被虐性愛と共存している点に留意する必要がある。それはク
ウィルプがキットへの復讐として古い船首像を錆びた鉄棒で打
ち据えている姿を見て、この男は「自分自身に似ているという
理由で家庭用の肖像として買い求めたのだろうか」(第二章)
とサムソン・プラスがいぶかる場面に暗示されている。

加虐性愛と被虐性愛の共存は自分の腕一本で中産階級への梯
子を昇った『互いの友』の学校教師ヘッドストーンの言動に
も見られるが、彼の場合はジェンダー問題と階級問題が複雑
に絡み合っていて非常に興味深い。自助の精神の体現者である
ヘッドストーンは日頃は本能を抑制しているが、リジー・ヘク
サムに関しては自己を抑制できず、教会墓地でのプロポーズの
場面(第二巻第五章)では、その暴力的なエネルギーが堰を
切って流れ、彼女を恐れさせている。彼が手を置いて押し退け
ようとする「笠石(coping)」と、拒絶されたあとで拳を打ち

下ろす笠石とが、彼女の心をつかんだ恋敵レイバンの象徴であることは即座に分かる。しかし、この行為が同じ「笠石 (headstone)」の名前を持つ自分自身への暴力であること、そして彼のリジーに対する愛が実際には副次的なもので、セルフメイド・マンとしての彼の自尊^{エゴ}心^{ハート}を徹底的に傷つけた(同じ中産階級でも上層の)弁護士レイバンに対する「憎悪と復讐心」の方がより重要であることを読み取らねばならない。レイバンは夜になって尾行するヘッドストーンを引っぱり回して発狂するほどイライラさせるが、この学校教師がそうした被虐的な状況を好む人間である点は、彼の性癖が「体の傷を刺激して得るような病人の倒錯した快感」(第三卷第一章)を求めるマゾヒズムにあることから明らかだ。従って、ヘッドストーンのリジーへの狂気の愛も、次作『エドウィン・ドルドの謎』の聖歌隊長ジャスパールによる甥の許嫁ローザ・バッドへの狂気の愛も、被虐的な快感を刺激してくれるライバルを巻き込んだ三角関係の中でしか意味がないのである。

ディケンズの世界では、結婚後にマーシーに暴力を振るうジョウナス・チャズルウィットやエステラを虐待するベントリー・ドラムルのような悪人たちのDVとは逆のパターン、すなわち夫に対する妻の暴力も頻繁に描かれる。そうした逆様の世界のトポスには二つの機能がある。第一の機能は愚かな権威に対する諷刺——『オリヴァー・トウイスト』では威張った小役人のパンブルがコーニー夫人と結婚して救貧院長となるが、二ヶ月もしないうちに妻の「手による攻撃」(第三七章)によっ

て主従関係がひっくり返り、洗濯女たちの押さえきれない爆笑を招いている。第二の機能はヴィクトリア朝の伝統的なジェンダー観に対する是認——〈手〉のイメージが支配的な『大いなる遺産』ではビップの暴力的な姉の「頑丈な太い手」によって夫のジョーも支配されるが、ジェンダー・ロールが逆転した家庭は結果的に暴力と無秩序しか生まないという理由で忌避される。ただし、ヘゲモニーの掌握が暴力に依存する夫婦関係は労働者階級だけに見られるものではない。ここで見逃してならない点は、中産階級のエステラとドラムルについても、夫婦の主従関係は「殴るか、ひるむか (either beats or cringes)」(第四七章)によって決まると弁護士ジャガーズが言って、事務員ウエミックがそれに同意していることだ。ヴィクトリア朝のジェンダー観に反した行動をとる女性へのディケンズの対応は暴力による女性の馴化 (taming of a shrew) で、その証拠にジョー夫人はオリーククの、モリーはジャガーズの、エステラはドラムルの腕力に沈黙させられる。女性が家庭の外で、特に〈公的領域〉で暴力を振るう場合、ディケンズは『二都物語』でフランス革命における「女性たちの光景は最も大胆な男をもぞっとさせた」(第二卷第二章)と述べているように、女性の暴力を女性性や母性の倒錯したものとして恐れ、その体現者で復讐の女神や聖女ギョティーンと同一視されるドファルジュ夫人を懲らしめるかのように銃の暴発で自滅させている。

『ドンビー父子』の山場として、家父長制を体現する女嫌いのドンビー氏によって、娘のフローレンスが殴打される場面が

第四七章にある。ドンビー商会社長としてのプライドとリスパクタビリティを傷つけられた夫が、恐ろしい妻イーデイスの反抗を暴力で抑圧できない点から判断すると、この父の娘への殴打は妻に対する暴力の置き換えと見なすのが妥当な解釈であろう。L・サリッジが言うように、このような暴力の移譲は自分を排除する「女性たちの慈しみや絆やセクシュアリティに対する彼の恐怖と憤り」(Surridge, *DS* 82)の表出としても読むことができる。従って、妻と娘が「ゲルである (in concert; in league)」というドンビー氏の苦情はあなたが被害妄想とも言えず、彼女たちの共通点が『リトル・ドリット』の非嫡出で自虐的なミス・ウェイドと彼女から悪影響を受ける捨て子タテイコラムの非倫理的な愛を疑わせるという意味では、ドンビー氏の娘に対する暴力も、彼の右腕カーカーと駆け落ちしかける義母イーデイスの跡を追って、娘が淪落の罪を犯す危険を阻止するための事前の罰として正当化できないことはない。いずれにせよ、ディケンズは感情を抑圧された女性の暴力性を描きながらも、女性性に反する暴力を鎮圧せずにはおれなかった。その一方で、女性の可視的(あるいは不可視的)な暴力を抑圧する男性側の暴力は許容される傾向がある。表向きには男女平等という原則に基づきながら、このように暴力については二重規範ダブルスタンダードに陥ってしまうディケンズが、ホモソーシャルな家長制社会における暴力のジェンダー化という因襲の桎梏から脱することは期待できない。この暴力のジェンダー化と二重規範の本質は次節で述べる階級の問題とも通底している。

第三節 抑圧の移譲と階級問題の解決策

誰によってなされたかが明確に分かる犯罪、テロ、暴動、戦争といった主観的暴力に強く反対する一方で、自分たちが忌み嫌っている、まさにその暴力なる現象自体を生み出すヘシテム的暴力⁹、すなわち責任関係がはっきりしない政治・経済における構造的な悪としての客観的暴力に関与している者たちの偽善について、S・シジエクは『暴力——六つの斜めからの省察』で論じている。そうした偽善者の典型として真っ先に思い浮かぶのは『ハード・タイムズ』の工場主バウンダビーである。この似非セルフメイド・マンは、労働組合のストライキや労働者の暴動を批判する一方で、貧乏ゆえに離婚できないブラックプールの不満を抑圧すべく、産業資本家の要求をイデオロギー的に代弁した(社会システムの暴力装置としての)自由放任主義を擁護し、現代社会ではバワハラ的一种と見なされるネグレクトを不干渉主義の立場から正当化している。このレッセ・フェールもまた行為主体が明確でない構造的暴力であり、現存する社会階級の強力な維持装置として機能する。それに対し、資本家のレッセ・フェールは労働者との溝を深めるだけで、「親切と辛抱と明るい物腰」(第二巻第五章)とて労働者に干渉しなければ、その溝を埋めることはできないと言いがら、ブラックプールはバウンダビーに〈隣人愛〉を求めている。自由放任主義的な無関心がディケンズにとつて新約聖書の

教え、とりわけ「善きサマリア人」の教えに反する不作為の罪であったことは間違いない。結局、ブラックプールは理解されることなく解雇されてしまう（図版③）が、このように資本家がイエスの隣人愛を持ってずにシステムの暴力に依拠せざるを得ない最大の原因は、現状を破壊するような暴力を秘めた（特に、集団化した）労働者に対する潜在的な恐怖なのである。

産業革命によって完成の域に導かれた資本主義社会は暴力に立脚した社会であった。それは資本家という少数の搾取者が労働者という多数の被搾取者に対して振るう暴力、レッセ・フェールやセルフ・ヘルプといった美名によって巧みに隠蔽された暴力に他ならない。なぜなら、機械の発明・使用は労働力の余剰を生み出し、労働力を売る以外に生活の手段を持たないプロレタリアートにとって、ブルジョワジーが提示する労働条件は絶対に拒否できないものであるからだ。その労働条件として、低賃金で過酷な労働の強制とともに、休息の強制がディケンズ作品で槍玉に挙げられていることは注目に値する。『リトル・ドリット』のクレナム夫人は夫の前妻——労働とは対照的な娯楽の職業に従事する歌姫——に対する嫉妬と憎悪ゆえに、その前妻を軟禁して発狂から死に至らしめ、自分を裏切った夫にはクレナム商会の仕事で、二人の間にできた罪の子アーサーには教育で、神の復讐という旧約聖書的な教えに基づく禁欲主義的なピューリタニズムを強制した過去を持つ。アーサーに精神的外傷を負わせた暴力的なイデオロギー、すなわち旧約聖書のモーセの第四戒を遵守した義母クレナム夫人の安息日厳守主義は、



図版③「天が、あっしら、こん世のみんなを、お助けくたせえますように！」（第2巻第5章、ハリー・フレンチの挿絵、ハウスホールド版）

マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に照らせば、月曜日からの労働に備えて被支配階級に日曜日の休息を強制し、生き抜くための息抜きとしての娯楽を彼らから奪う暴力であった。その意味で看過できないのは、ディケンズが一八三六年のパンフレット『日曜日に関する三考察』や『ハウスホルド・ワーズ』の一八五〇年六月二二日号の記事『日曜日の締め付け』の中で、労働者への過度な精神的圧迫が必ず反動的に集団的な暴力として資本家に跳ね返ってくるだろうと警告していたことである。

しかし、支配階級と被支配階級との間の径庭は、産業革命によって伝統的な社会階級が多少は流動化したにせよ、ディズレイリが政治小説『シビル』で貧困にあえぐ無産階級と利己主義に染まった有産階級をへ二つの国民』として描いたヴィクトリア朝の初期においても、依然として埋めがたいものであった。従って、女王を頂点としたピラミッド型の階級を基盤とするヴィクトリア朝社会における人間関係の力学^{ケナクス}については、丸山眞男が「超国家主義の論理と心理」で述べているような、上から受けた抑圧を下へ譲り渡すことによって精神のバランスが保たれる、いわゆる「抑圧の移譲による精神的均衡の保持」という原理がそのままの形で当てはまる。¹¹この抑圧の移譲は同じ階級の中でも階層がある限り必ず発生する。¹²例えば、慈善学校出身とはいえ少なくとも両親がいる『オリヴァー・トウイス』のノア・クレイポールは、世間一般では私生児を連想させる救貧院出身の孤児オリヴァーよりは階層的に上位なので、慈

善学校出身でない、近所の小僧たちのイジメを日頃じつと我慢しているストレスを発散すべく、それに大きな利子をつけてオリヴァーに移譲することで精神を安定させている。「やんごとなき貴族から汚い慈善学校の少年まで階級に関係なく見られる」(第五章)とディケンズが語っている人間性は、まさにこの精神的均衡の保持のためになされる抑圧の移譲ではあるまいか。

それでは、階級が下位の人々(例えば、労働者たち)が団結して集団としてパワーを得た場合、抑圧の移譲ができない中産階級の人間はどうしたであろうか。ディケンズは労働者階級の暴動、ストライキ、革命の大義には少なからぬ理解を、そして抑圧された個人としての、労働者には大いなる共感を示しているが、目的のために手段を選ばないマキャベリズムには反対で、暴力組織と化した集団としての、労働者を嫌っている。¹³フロイトは「集団の中に個人が寄り集まると、個人的な抑制がすべて脱落して、太古の遺産として個人の中にまどろんでいた残酷で血なまぐさい破壊的な本能がすべて目覚めさせられ、自由な衝動の満足を駆り立てる」と述べているが、¹⁴ディケンズもまた暴力集団と化した労働者の猥劣・犯罪的欲望による社会システムの転覆を恐れていた。しかし、暴力を忌避するディケンズと同時に、例えば『バーナビー・ラッジ』でゴードン暴動を描く際に、フォースターに宛てた手紙で「私はニューゲイトの囚人をすべて解放し、マンズフィールド卿の屋敷を焼き払い、滅茶苦茶にしてやりました」(18 September 1841, *Letters* 2: 385)と語っているように、暴力的な群衆の破壊活動に参加したいとい

う衝動に駆られた、つまり暴力に魅了されたディケンズがいたことも事実である。また、『イタリヤ紀行』で克明に描かれたヴェズヴィオ火山の噴火口の燃えさかる炎は、その恐怖にもかかわらず接近したいという抗しがたい欲望にディケンズを駆り立てている(第一章)。労働者に対する共感と反感、暴力に対する忌避と魅了の共存といったアンビヴァレンスは、階級を超えた万人共通の感情として恐ろしいものやグロテスクなものに関しても当てはまる。『バーナビー・ラッジ』のゴードン暴動で言えば、「驚異に対する好奇心や怖いもの見たさは天地創造以来の人間が持つて生まれた特性」(第五四章)なのだ。十二世紀末にタイバーンで始まったイギリスの公開処刑は、一七八三年にそこからニューゲイトに場所を移し、ヴィクトリア朝になってもディケンズが死ぬ直前の一八六八年まで廃止されなかった。この大衆娯楽は、怖いもの見たさに集まった見物客に對して対岸の火事としての安心感に加え、カーニヴァルの最後に自分たちの暴力の責任を彙人形に転嫁して火あぶりの刑に処する時のように、防衛機制としての投影で得られるような安心感も与えていたのである。

『二都物語』の最終章でディケンズは、「再度あの飽くことを知らない乱行や弾圧 (license and oppression) と同じ種子を蒔いたならば、その品種に応じた同じ実を必ず結ぶであらう」(第三卷第一五章) という死の警告を発している。畢竟するに、暴力は暴力しか生まないという単純明快な考えから、ディケンズが階級間の暴力問題に対して出せる解決策は新訳聖書におけ

るイエスの教えしかない。言い換えれば、暴力の連鎖を断ち切る唯一の手段は、恐ろしい集団の暴力と対照的に描かれている個人のアガペー、つまりドファルジュ夫人の憎悪と復讐を具現した群衆の暴力的な革命ではなく、歴史の片隅で特定の個人の記憶だけに残るような使命を果たすシドニー・カートン個人による自己犠牲的な愛である。¹⁵ J・ルーカスは暴力こそ「社会変化をもたらす唯一の方法」(Tucas 207)だと主張しているが、ディケンズ研究者の大半はB・G・ホーンバックの「結局、世の中を变革して混沌に秩序を与えるには、革命以上に愛の方が急進的で、より善い手段である」(Hornback 118) という逆説をディケンズの考えと見なしている。ディケンズが小説世界で(少なくとも読者向けに)そうした考えを示していることは事実である。しかし、暴力に関しては、この作家の現実世界と小説世界、本音と建前を区別しなければならない。その点を最後に人種の問題で確かめてみたい。

第四節 ショーヴィニズムによる人種差別

世界中で海賊行為を繰り返していたフランスス・ドレークがエリザベス一世のもとで海軍提督としてスペイン無敵艦隊を打ち破った十六世紀末から、英国は海外の有色人種に対する暴力と略奪に依存していた点で海賊立国だったと言われても仕方ない。その間、カーライルやキプリングは優れた人種である白人による有色の劣等人種支配を「神の意志」や「白人の責務」と

して正当化した。彼らには自分の「目の中の梁」（「マタイ七章三節）が見えていなかった。そもそもコーカソイドの〈白〉は、すべての色の可視光線が乱反射した時に人間が知覚する色だから、たとえ伝統的に善や正義のイメージが与えられて来たにせよ、彼らが〈黒〉のネグロイドや〈黄〉のモンゴロイドに付与した否定的属性を実際には自分たちも持っていたことにな。そこには当然ながら暴力性や残虐性も含まれていたはずである。植民地主義であれ帝国主義であれ、文明化された中心の本国と文明化される野蛮な周縁の国々は、こうした二項対立的な価値観で分類できる一方で、文明の中心にも〈闇の奥〉としての野蛮な周縁（典型的な例は『エドウィン・ドルードの謎』でジャスパールが通う帝都ロンドンの中心にあるイースト・エンドのアヘン窟）が存在し、その逆の場合もまたしかりで、このような構図はディケンズの作品では入れ子構造（チャールズ・ディケンズ）となっている。

一八六七年に出版されたディケンズとコリンズの最後のコラボ作品「行き止まり」では、ワイン会社の地下貯蔵室頭ジョウイ・レイドルが家父長制ファミリィによる水曜コンサートの参加者すべてを「わめき散らすダルウィーシユの集団」と見下している。もともとダルウィーシユとは体を激しく回転させて踊りや祈祷で法悦状態に入るイスラム教の托鉢僧を指し、のちにイギリスでは「踊り狂う人」全般の意味で使用されるようになった。このレイドルの最大の問題は自分が理解できない他の人種の文化を狂気の沙汰と見なす植民地主義的な視点である。しかし、実際には理解できない自分自身の劣等性を自分が無意識的

に恐れている対象に投影することで、外的なものとして処理しているにすぎない。このようなレイドルの視点は、人種差別的な狂信的愛国主義（シヨウヴィニズム）として、ヴィクトリア朝の人々が階級の壁を越えて多少なりとも共通して持っていたものである。それは大主義の変奏であり、例えば『リトル・ドリット』で「我々が見つけるためには隣の通りまで行く必要のない欠点」（第二章 第十七章）として、ミーグルズという中産階級のプラクティカルな男を通して描かれている。ミーグルズの名前が伝染性の極めて強いはいしか（measles）から来ていることは間違いない、この小説の原題「誰の責任でもない（Nobody's Fault）」つまり「万人共通の欠点」は当時の社会に蔓延していたシヨウヴィニズムという病気の一種としても解釈できるだろう。見落としてならないのはディケンズ自身もそうした病原菌の保有者であった点だ。その証拠に、例えばイタリア人カバレットの言語表現の激しさについて、「北国生まれの人間にはまったく正気の沙汰とは思えぬ激しさ」（第二巻第二章）と表現している。

イタリアと同じカトリックの国アイルランドに関しても、イギリスの事実上の植民地だったということで、ディケンズの差別意識が見られる。ロンドンの犯罪地区を巡回したルポルタージュ「フィールド警部との見回り」（HW, 14 June 1851）では、アイルランド人が「チーズの中のウジ虫」にたとえられている。また、ディケンズのレイシズムの議論でよく言及される「高貴な野蛮人」（HW, 11 June 1853）という諷刺的なエッセイでは、ロマン主義文学で理想化された文明に汚されぬ素朴で勇敢な未

開人が「残虐、虚偽、泥棒、殺人をなし、獣の脂やはらわた、そして残忍な習慣にふける野蛮人」と見なされ、イングラントを訪問した西部開拓時代の画家ジョージ・カトリンによるアメリカ・インディアン人のシヨも酷評されている。

こうした他の人種に対するディケンズの偏見や不寛容さは、一八五七年のセポイの乱前後に鮮明な形で現れる。この年に出版されたコリンズとの合作「英国人捕虜の危険」の舞台は中央アメリカのベリーズ（当時は英国領ホンデュラス）だが、着想はセポイの乱時に捕虜となったイギリス女性たちの勇敢さであり、ディケンズがクーツ女史に宛てた手紙では、イギリスの婦女子になされた残虐行為に対して「目には目を」の同害復讐だけでは我慢できず、相手の人種を皆殺しするというジェノサイド願望が示されている（4 October 1857, *Letters* 8: 439）。この短篇小説で、ディケンズの代弁者と思しき語り手、ギル・デヴィスは私生児で読み書き能力がないながらも立派な英国海兵隊の一兵卒となるが、「サンボ」の水先案内人クリスチャン・ジョージ・キング（図版④）に対して本能的に抱いた嫌悪感が単なる偏見でないことを証明しようとするかのように、サンボの正体が「極め付きの裏切り者で極悪非道な人でなし」であったことを何の前触れもなく暴いている。この安易なプロット展開は逆に語り手＝作者自身の人種的偏見を浮き彫りにしてしまう。なぜなら、英国海兵隊の敵である残虐な海賊たちはサンボや黒人に加えて、オランダ人、ギリシヤ人、ポルトガル人、スペイン人、西インド諸島に流刑されたイギリス人といった欧州



図版④「サンボの水先案内人と英国海兵隊員たち」（第1章、エドワード・G・ダルジアルの挿絵、ハウスホールド版）

の人間によって構成されているからだ。いずれにせよ、このデイケンズの極端な暴力的反応に関しては、L・ネイダーの指摘にあるように、『イグザミナー』紙をはじめとする当時の新聞に見られたヒステリックな世論に後押しされたことが主たる原因である(Grayder 100-01)。だが、それとは別に反乱勃発の二ヶ月後に息子ウォルターがクーツ女史の尽力で士官候補生としてインドへ赴任したことに對する親としての心配や、この時期にフォースターに打ち明けている妻キャサリンとの軋轢による苛立ち(33 September 1857, Letters 8: 423-30)も原因としては見逃せない。

デイケンズのレイシズムは彼が死ぬまで減退することなく、むしろ一八六五年のジャマイカ事件によって強化されている。イギリスでは一八〇七年の奴隷貿易廃止法、三三年の奴隷解放令にもかかわらず、黒人問題は未解決のままであった。『デイヴィッド・コパフィールド』が連載された当時は、奴隷制度の復活を提唱したカーライルのような保守的な考えと、黒人の劣等性は環境のせいとし、そうした意見を合衆国の奴隷制度を支持する悪魔の仕業として非難したミルのような自由主義的な考えが対立していた。黒人を「ニガー」と呼ぶカーライルと「ニゲロ」と呼ぶミルは実際に『フレイザーズ・マガジン』の一八四九年一月号と翌年一月号で論争している。とはいえ、支配階級の大多数はカーライル的な考えであり、デイケンズの黒人観もそれと大差なかった。その証拠に、直前の作『ドンビ―父子』で黒人を召使いとして雇っているバグストック少佐が、

その黒人に八つ当たりする際の様々な暴力の描写については、残虐さよりはむしろ滑稽さが強調されている。

カーライルとミルは一五年後のジャマイカ事件でも対立するが、この事件でもデイケンズは中産階級に支配された世論に従い、無差別に黒人を虐殺して強硬な弾圧政策をとったエドワード・エア総督をカーライルと一緒に擁護した。『エドワード・ドルードの謎』では、ジャマイカ委員会でもミルとともに急先鋒だった委員のジョン・ブライトを「どこか熱帯の未開地から連れてこられた美しい原始人の捕虜」(第六章)みたいなランドレス兄妹の無責任な後見人、ロンドン博愛協会の横柄な會長ハニーサンダーとして描き、悪魔のような原住民に対する軍隊の使用を批判する似非平和主義者として愚弄している。

このジャマイカ事件の翌月に連載が終わった『互いの友』では、下層中産階級の事務員R・ウィルファーが娘ベラの愛情深い性格をジョン・ハーモンに証明しようとする際、アフリカの黒人の王様を「安かろう、悪かろう(cheap[and] nasty)」(第二卷第一章)として蔑んでいる。しかし、ウィルファー夫人が新婚のハーモン夫妻の家を訪れる場面で、作者は彼女を「少しでも驚嘆の素振りを見せると沽券に関わると思っている野蛮な酋長」(第四卷第一章)にたとえている。デイケンズに揶揄の意図があったか否かはさておき、大英帝国の中産階級にせよ、劣等民族の支配者にせよ、リスベクタビリティという「安かろう、悪かろう」の価値観に囚われていた点で両者に大きな差異はない²⁰。さらに興味深いのは、ヴィクトリア朝の女性性が

ら逸脱していたベラが精神的に成長し、最後は「家庭の天使」として中産階級の私的領域に回収されている点で、これは家政や育児に無関心でアフリカの黒人を文明化すべく「望遠鏡的博愛」（第四章）に熱中する『荒涼館』のジェリビー夫人の描写で分かるように、中産階級の女性が公的領域で活動することに対するディケンズの根深い嫌悪感を反映している。実際に、前期の作品でピクウィック氏や改心したスクルージのような個人を通して全人類的に示されたディケンズの慈善や博愛主義は、後期になると徐々に減退し、時には痛烈な皮肉の対象となり、周縁化された他者に対する彼の言説にはレイシスト的、反フェミニスト的なニュアンスが多く含まれるようになっていく。

* * * * *

結論として言えるのは、ディケンズの帰属意識はイギリスが産業革命による経済力と軍事力で覇権国として栄えた「パクス・ブリタニカ」を実質的に支えていた中産階級にあつたことで、イギリスが安定した自由主義の国際システムを維持することで、その経済的な利益を植民地や諸国が享受できるといって「覇権安定論」を奉じていたことである。ここでは植民地や諸国に対する暴力は公務執行型の正義の暴力として許容されてしまう。家長制社会における男性の女性に対する暴力のみならず、支配階級の被支配者階級に対する暴力もまた同断である。従って、たとえ当時の社会が支配階級の不正によっていかに墮

落していたにせよ、中産階級の作家であるディケンズに求めることができたのは、暴力による下からの革命ではなく、（時代的には前後するが）ピクウィック氏とサム・ウェラーとの信頼関係に見られるような、産業革命以前の前近代的な家内工業における優しい親方と滅私奉公する弟子との関係、換言すれば、道徳的に改善されたパターナリズム——G・オーウエルの言葉を使えば、「現存するものを道徳化したヴァージョン」(Orwell 46)——しかなかった。それは教育分野で言えば、昔からあるタイプの学校から鞭打ちやイジメといった暴力を取り除いた学校、例えば『デイヴィッド・コパフィールド』でクリークル校長のセイレム・ハウスから暴力を取り除いたストロング博士の学校ということになる。要するに、暴力による改革を支持することは、ディケンズにとっては自縄自縛の行為、自分の土台を突き崩す行為という点で、許容できないことなのだ。

確かに、ディケンズは他者としての女性、労働者、有色人種といった弱者の味方として、彼らに対する暴力行為を忌避しながら作品では批判しているが、それはあくまでも作家としての建前だ。J・ケアリが「ディケンズと暴力」論で主張しているように、「ほとんど何でも二つの違った視点で見ることができ」（Carey 15）のは、この作家の思考の一大特徴である。その意味でもディケンズの建前と、暴力に恐怖を抱きながらも魅了されてやまず、ジェンダー・階級・人種の問題で劣等視される対象への暴力を公務執行型の暴力として正当化する彼の本音とは、分けて考える必要があるのではないだろうか。

注

1 Max Weber, *The Vocation Lectures: "Science as a Vocation," "Politics as a Vocation,"* trans. Rodney Livingstone (Indianapolis: Hackett, 2004) 33.

2 "Newgate," *The Irish Law Times and Solicitors' Journal* 33 (1899): 406; Frank McLynn, *Crime and Punishment in Eighteenth-Century England* (New York: Routledge, 1989) 257.

3 ジョージ三世時代の監獄の悲惨さについては監獄改革者「ハワードの『十八世紀ヨーロッパ監獄事情』、特に「イギリスの監獄事情」に詳し。John Howard, "A Particular Account of English Prisons," *The State of the Prisons in England and Wales*, introd. Kenneth Ruck (1777; London: Dent, 1929) 235-96.

4 Michel Foucault, *Discipline and Punish: The Birth of Prison*, trans. Alan Sheridan (1975; New York: Vintage, 1995) 135-69. 十八世紀の狂人保護院が監禁することを目的にしたのに対し、十九世紀の精神病院が治療する場所として機能するようになったことは『狂気の歴史』の著者フォーコーその他が指摘している。Michel Foucault, *Madness and Civilization: A History of Insanity in the Age of Reason*, trans. Richard Howard (1965; New York: Vintage, 1988) 251-52. しかし、ディケンズが副編集長 W・H・ウィルズと共に同執筆した「奇妙な木を囲んでの奇妙なダンス」(*HW*, 17 January 1852) に記されているように、彼が一八五一年末に訪問した聖ルカ

精神病院で見たものは、様々な拷問器具や医師たち自身の狂気を疑わせるような治療器具であった。

5 編者のウェブ版コンコードダンス <http://victorianlang.nagoya-u.ac.jp/concordance/dickens/> によれば、「暴力／暴力的 (violence/violent)」という単語の使用頻度はディケンズの前期作品で高く、中期以降で低くなっている。前期作品で頻度が高いのは、勧善懲悪に対する作者の意識が強く、暴力を基盤とする支配・被支配の人間関係の逆転をトピクスとしているからだと考えられる。母親の悪口を言われてノア・クレイポールを床の上に殴り倒すオリヴァー(第六章)、スクウイアーズ校長から鞭を奪って相手を打ちまくるニコラス・ニクルビー(第一三章)、偽善者ベックスニフの罵詈雑言に対して強烈なパンチを繰り出しそうになる弟子のマーティン・チャズルウィット(第一二章)——こうした主人公たちの赤裸々な暴力行使が、その何よりの証左である。面白いのは前期の作品が産業革命期の社会風潮に、中期以降の作品がヴィクトリア朝の社会風潮に呼応していることで、これは時代の変化とともに暴力が抑圧されて別の形をとっていることの裏付けとなるだろう。

6 作品自体に該当する描写はないが、不満を述べたピップが退室する際に閉めたドアの勢いで、暖炉の石炭が一つ転がって花嫁衣装が炎上するとういふデイヴィッド・リーン監督の映画(一九四六年)の演出は、ピップの抑圧された憎悪と復讐心を顕在化させた点で秀逸である。

7 ディケンズ自身が妻キャサリンに暴力を振るっていたか否かに関しては、編集長の言うことをきかないギヤスケル夫人について

の「私が夫なら、絶対おん殴つてやるのに」(11 September 1855, *Letters* 7: 700) という言葉や、フォースターに語った妻の気質についての不平不満 (23 September 1857, *Letters* 8: 430) といった状況証拠から判断するならば、妻に対するディケンズの苛立ちがDV になっていった可能性は高い。

8 ミス・ハヴィシヤムは本当の愛を「盲目的献身」で「暴力を振るう人 (smite) に全身全霊を委ねること」(第二十九章) だとピップに定義してやるが、この「マゾヒズムの脱ジェンダー化」(Carol Siegel, "Postmodern Women Novelists Review Victorian Male Masculism," *Genders* 11 [1991]: 10) は、すでに姉の暴力を内面化していたピップが、女性の愛とは暴力や苦痛を伴うものだと思ひ、ビディーよりもエステラを求めるようなマゾヒストに突き進むための後ろ盾となっている。

9 デイヴィッドの伯母ヘツイー・トロットウッドは、結婚して暴力的になった夫を追い払うことなく死ぬまで金を渡し続けている(第七章) が、この温情が夫に対する憎悪を抑圧した(反動形成) だとするならば、その脆弱な反動形成を常に脅かす無意識的衝動は、ドンビー氏の女嫌いと対照をなす男嫌い(モソフ) という形で外に向けられ、例えば甥が誕生した場面やロバを追い払う場面、マードストンの暴力的な威嚇にも屈しない場面に現れている。

10 Slavoj Žižek, *Violence: Six Sideways Reflections* (New York: Picador, 2008) 206.

11 丸山眞男「超国家主義の論理と心理」『現代政治の思想と行動』(一九六四年・未來社、二〇〇六年) 二五頁。「二都物語」のエ

ヴレモンド侯爵については、大公貴族の接見の儀での孤立や甥のダーネイとの会話から、宮廷の不興を買っていることが分かるが、その抑圧を移譲するかのよう侯爵は平民や農民を虐げ、「抑圧だけが不易の哲学だ」(第二巻第九章) という信念を表明している。

12 ローザ・ダートルとミス・ウェイドは抑圧された怒りと欲望を言葉の暴力によって表現しているが、彼女たちの怒りはジェンダーと階級の劣等感——『荒涼館』のフランス人侍女オルタンスの場合には人種も加えた劣等感——によって引き起こされている。自分の感情を弄んで捨てた(もしくは虐待した) 男への彼女たちの怒りは、自分に取って代わった女——こちらも弄ばれて捨てられる運命の女——に対する嫉妬や自分を劣等視する別の女に対する怒りに置換されるが、これもまた一種の抑圧の移譲だと言えるのではないだろうか。

13 労働者に対する共感と反感というアンビヴァレンスに対処すべく、ディケンズは支配階級と被支配階級の暴力の行使について、例えば『ハード・タイムズ』では双方の階級を批判せずに、両者の衝突を激化させることで利益を得るストライキの煽動者(スラックブリッジ) に非難の矛先を向けている(第二巻第四章)。こうした対処法は、ディケンズが「鉄道ストライキ」(*HW*, 11 January 1851) で述べた「もともと正直で大人しい働きの労働者たちが、下心のある金目当ての煽動者に洗脳されて暴力集団に巻き込まれている」という観察から生まれたと思われる。ただし、『ハード・タイムズ』では労働組合自体も、レイチェルとの約束によって組合員になろうとしないブラックプールを村八分によって威嚇するような、暴力集

団として批判されてくる。

14 Sigmund Freud, "Group Psychology and the Analysis of the Ego (1921)." *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, vol. 18, trans. James Strachey (London: Hogarth, 1981) 79.

15 その意味で、貴族階級の抑圧という監禁状態から解放される手段として下層階級が振るった「他者への暴力」は、(反キリスト教的な自殺という「自己への暴力」になりかねない自己嫌悪からルーシーによって解放された) カートンの自己犠牲的な死というキリスト教的な「自己への暴力」によって浄化されているというJ・キューシッチの解釈 (Kucich, *DSA* 120) には説得力がある。

16 松村昌家氏は、『互いの友』——^{エナジー} 気力を嫌って倦怠^{アレンゴ}に生きる弁護士レイバーンによって世紀末のムードが漂う小説——が完成した翌年、『オール・ザ・イヤー・ラウンド』に掲載された「ラザロの夢心地」(ATYR, 12 May 1866) というイースト・エンドのブルーゲイト・フィールズにあったアヘン窟に関するルポルタージュに注目し、このアヘン窟の雰囲気を六九年五月に体験したディケンズが『エドウィン・ドルドの謎』の着想を得て、自分自身とジャスパールの二重生活をロンドンの東西への二極分裂に対応させたと述べている(松村 二二四〜二六)。第二次アヘン戦争後の一八六〇年代に中国からの移民がイースト・エンドに急増してアヘン窟が誕生した結果、中毒になるイギリス人も少なくなかった——アヘン戦争に反対したグラッドストーンも演説の前にはアヘン入りのコーヒを飲んでいたし、当時はアヘンの売買も使用も禁止されていなかった——ことを

考えると、イースト・エンドのアヘン窟はアヘン戦争で侵略された国による暴力的な逆襲の具現化とも言えるだろう。

17 例えば、『大なる遺産』の流刑囚マクグウィッチは自分自身を、帝国の中心から対蹠地のオーストラリアへ遠ざけられた他者ではなく、対蹠地の中心にいる植民者と思ひ込んでいるが、そのような視点によって中心と周縁という図式は脆くも瓦解する。彼が命を賭けて帰国した真の動機は、恩義を受けたビツプに会って感謝するためではなく、自分が作った紳士を見て満足するためである。ロンドンで紳士を作れることは帝国の中心から認知されるだけでなく、植民地での成功では獲得できない中心的な体制における自己の確立も同時に意味する。しかし、周縁の他者から中心の自己へというマクグウィッチの野心は、労働者から紳士になるビツプの野心と同じように、他者としての自分を再確認する皮肉な結果にしかない。

18 『二都物語』で暴力集団と化した労働者たちが「自由の木」を囲んで踊るカルマニヨールは、彼らの狂気と無秩序の尺度としての意識のエントロピーが限界を超えて流出した結実であり、ディケンズが革命の本質と見なした逆様の世界を構築する典型となっている。一方、このダンスのパロディとして提示された「奇妙な木を囲んでの奇妙なダンス」は、狂人たちが踊るダンスの整然と統制された秩序を描くことで、精神病院内での厳しい規律・訓練^{ディシプリナ}を揶揄している。

19 ディケンズはヴィクトリア朝初期に蔓延していた因襲的な反ユダヤ主義を信奉していたわけではない——むしろ、ヒューリタン、カルヴィニスト、福音主義者といったキリスト教徒を批判していた(Schlicke, *Companion* 309)——が、一般のユダヤ人を強欲な商人

と見なす偏見から脱していたわけでもない。例えば、『オリヴァー・トウィスト』でフェイギンを読者に紹介するとき、ディケンズは彼のことを「悪党づらした、いけ好かない、とても老けた、皺くちゃのユダヤ人」(第八章)として描いているし、この男を示す言葉としては「フェイギン」という実名よりも、「ユダヤ人」という人種名の方を多く使用している。ディケンズがフェイギンをユダヤ人とした理由は、一八六〇年に自宅のタヴィストック・ハウスの賃借権を買ってくれたユダヤ人銀行家の妻、デイヴィス夫人への手紙で弁明しているように、作品が設定された時代には「そうした部類の犯罪者がほとんどいつもユダヤ人だった」(10 July 1863, *Letters* 10: 269)からである。しかし、この気の合った夫人から、フェイギンの描写がユダヤ人に対する世間の偏見を助長していると言われたディケンズは、その償いとして『互いの友』ではユダヤ人ライアを高徳の老人として登場させ、リジーに仕事を見つけてやる善良な人物として描いている。

20 ディケンズにとつては日本人もインド人と同様に劣等民族であったようだ。「柀亭」(*Hwy*, 1855 Xmas No.)では、広い部屋に泊まった主人公のために宿の連中が「漆を塗った (gapaned)」^{スクリン}衝立を防寒用として準備してくれるが、その衝立に描かれた「日本の原住民」(実際は中国人だろう)が従事している様々な仕事は、ディケンズが理解できないという理由で「馬鹿げた (idiotic)」ものとして処理されている。『ハード・タイムズ』において日本の天皇——昭和三年の柳田泉訳(新潮社)では〇〇という伏せ字になっている——が大好きな気晴らしとして馬上で五つの洗面器をくるくる回してい

るスリアリー曲馬団の場面(第三卷第七章)から判断しても、ディケンズは道化の娘シシー同様に日本について何も知らなかったと思われる。何か知っていたとしても、それは『エドウィン・ドルードの謎』の第四章に登場する愚鈍で思い上がった競売人サブシー氏の場合のように、耳学問による聞きかじりの域を出るものではない。一般人の間で日本への関心が高まったのは、イギリス公使オールコックが蒐集した約九百点の品々が——開会式に参加して人々の興味を引いた竹内遣欧使節団も言わば展示品のようなものだったが——第二回ロンドン万博で展示された一八六二年以降のことである。